令和４年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 秋葉　倫史

研究課題名	完了形の発達と動作主性の関連について
研究目的及び研究概要	本研究の対象となる完了形の発達については、（1a）から（1b）の構造変化として、所有の意味を表しNPをとる本動詞 have が助動詞として再分析されるものとして説明される。 (1) a. America [VP [V has] [[NP a role] [A found]]]. b. America [VP [has [V found]] [NP a role]]. (Denison 1993: 340) 昨年度は古英語（OE）における自動詞と共起する（NP を取らない） have 完了形について調査を行い、その結果、動作主性（agentivity）を表す動詞・文脈が完了形の発達に影響することを示した。本年度は OE における完了形全般に調査対象を拡張し、完了形の発達と agentivity の関係を示すことを目的としている。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	本年度の調査として、まず、OEのコーパス（York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English）を用いて、have construction（「have + past participle（p.p.） + （NP）」あるいは「have + NP + p.p.」等）の974例を抜粋し、その文脈・使用されている動詞の検討を行った。また、have construction の語順に関して、現代の完了形の語順「have + p.p. + （NP）」をとる例と起源となる「have + NP + p.p.」をとる例を、agentivity の観点から対比させて検証した。その結果として、完了形へと発達する「have + p.p. + （NP）」の語順をとる例がより agentivity を表す可能性が示された。 今後は発達の過渡期となる中英語期の例も参照して研究を行うつもりである。なお、上記内容をまとめたものを、令和５年度、所属学会で発表予定である。